

歳をとるといいうこと

入来院 重朝



最近字を書くことが億劫になった。つまり根気が無くなりつつあるのだ。歳を取るということが、こんなところに現れてくる。事実、歳を取ったということに、実際気付かされることはそんなにしよっちゅうは無いのだが、気が付くとやはり愕然とする。

つまり生きるというのは相当なエネルギーがいるのだ。歳を取るということは、つまり足が弱くなるのだ。足は第二の心臓だから、ここが弱るということは、結局死期が相当追ってきたということだ。しかしもうすぐ八十七歳になるところだが、まだすぐに死ぬわけではないから、我慢して足を動かしてなんと

か起き上がって、エッチラコと歩くわけだ。

人間はなんだかんだと言っても、しぶといからそうやって生き延びていくのだ。誰だっけそうだろうと思う。死ぬまでには相当時間がかかるから。歳を取れば死にたいと思うことが多くなるが、だいたい九十近くなるとそれぞれが皆そんな感じだと思う。しかし、九十を過ぎて百近くになってくるとだいたい見ているとまるで人形様のようだ。自分の意思をはっきりと示していることはまずない。生かされているという感じである。

最近、テレビ等で西郷どんがよく出てくるが、実際はどんな人だったろうと思う。実際に実在した人物だから、想像しても限界がある。想いは限りなく拡散し、結局実像には届かない。空虚な観念のみがそこに残る。つまりいい人だった、立派な人だった云々。このことは仕様がないうのみだ。

現実の人生は人それぞれ独自の深淵を抱えている。人と比べようがない。ただ黙って人は己の人生を生きていく。その塊が世間を作っているのだ。

しかし人は何か一つのこと熱中することがある。それが故意に作られたものであるにせよ、ないにせよ一度この熱中にハマってしまうと人はしばらくこの渦から逃れられない。それが戦争であるにせよ、ないにせよ人は一度興奮すると、しばらくはその渦から逃れられない。しかし普段、世間は尋常に生きているから心配はない。

(炉ばたセイ談庵主)



第7回入来薪能『巴』(2010年8月28日)より